



大饗を賜はりて

▲天國にでも参つたやうな心地

箕浦遞信大臣謹誌

[illegible]

▲頂戴の御膳部は之れを配分せん

元帥川村景明子謹話

回の御大典、實に我邦三千年の歴史を一貫して流るゝ國民の大格
 搾したるものなるが、陛下が茲に新たに神を崇み、祖を敬ふべき國民
 鐵を垂れ給ひては、誠に異き次第なり。今日の大變災の事、朕甚嚴なるこ
 申す。遂にきこせるが、道は陛下が天津高御座に即ち給ひて、慶
 親王と共にせさせらるゝ、大御心に出でたるものなるを、以此の大御心
 すれば、賜はりたる御親部も、吾々少數者の間にのみ、頂戴するに忍びざ
 りて、早速東京へも送りて、廣く親戚知已の間に、
 方して恩賜に露けしめ、及ぶ限り慶を治めかしめんぞ欲す
 ▲一飲して勇氣百倍せる白酒黒酒

入江子爵謹話

たじたた而も自分は和歌の家(冷泉家)に生れ多少

を學んだといふ事から今日の名譽を増よこしたつた畏れ多くも
を締め奉り内外の文武高官衆の席上で披露するゝとは自分一
の名譽に申すまでもなく子々孫々の榮譽としし
ににおけしなから我々陛下を召されて一同に宴を賜はるといふこと
如何にも有難いことで其上に祖宗に捧げられし白濁黒酒をも御有るも
この事は何とも申儀のない恐れ多い事で白濁黒酒の風味は烈々とし
飲大に勇氣を鼓舞する體に頂戴した

功勞表彰 (七)

藤井寛太郎

明治三十七年朝鮮に來り、爾來水田耕作に力を致し、全羅北道靈山、天啓郡に地方官を遣ふ。三餘、計に漑漑を爲し、農田を墾闢し、工塲及米所を築め、地方官を倭遣し、明治三十八年、歐米の穀米を運來し、米穀を賣出し、揚州工塲及米所を設け、米穀の轉賣方法を改良す。歐米の穀米を運來し、米穀を賣出し、揚州工塲及米所を設け、米穀の轉賣方法を改良す。歐米の穀米を運來し、米穀を賣出し、揚州工塲及米所を設け、米穀の轉賣方法を改良す。

▲精密に行届いた莊重な御儀式

が非常に綿密に行届いて居て

りから終りまで實に順序よく武正に行はれた自分達便は、陛下の御前前に二々側となつて皇族の方の次席に著席した裝飾の総體で、紫雲の如く花が出來なかつたが絶えず舞臺の方から起つて來る日本古代の樂と歌の如きは非常な靜かに示し更に語を次ぎ其れから言ひつゝ御料理に添へられた銀の挿華を記者に示し更に語を次ぎ其れから銀製の橘と櫻の花は紫宸殿の前に飾られる由緒のある花と云ふいふ意になりまゝ土間に少しづつ酌がれた白と黒の酒も味も知らなかつたけれども古代の儀禮の物として面白く思ひました。その後で温かい酒を酌がれた菊の御紋と鳳凰を金で描いた盃をもいひ物です。併し今日まで參列した諸儀式の中で自分に最も深い感銘を與へたのは御即位式の莊重な點は勿論であるが其の順序はれた實に大前代に響いて來る時は何とも言はれぬ微妙な感じが起つた。今回の御大典に當つて吾々使臣の待遇は充分に行届いてゐる（京都特派員報）

金牌受領創業一週年紀念品大賣出

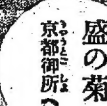
[illegible]

朝鮮語會話

發賣以來好評噴々、日未だ淺きにも拘らず、破天荒の賣高を示したる
新刊大如記 袖珍三百二十箇頁定價金八拾錢（郵税六錢）
 本書は朝鮮語修習上書ありて益なき一切の不必要物を除去じ、見掛上
 の體裁を避けて紙數の膨大を防ぎ、繁に堪へざる單語羅列式の死文字
 を減却せり。又彼の言語を學ぶ者の最も困難とする動詞其他の説明
 のの如き、解釋緊に肯りて餘す所なく、一度本書を手すれば、言葉の
 應用自由自在にして、所謂「きつぱり」としたる語を學ぶを得べし。而
 して初學の人士の爲めには巧妙に發音假名を附したるを以つて、世の
 徒に無駄骨折るること多年、苦心慘憺、漸くにして不自然的なる發音に
 して、多少の語句を暗記するの愚を避くるを得べし、既に本書の價值
 は世に定れる評あり。斯道の人士の切に學ばんと欲する朝鮮語の智識
 は本書に説き盡して餘蘊なく、敢て江湖に勸む速に本書を求められよ

發行所 京城大平通一丁目
 振替口座京城三〇〇番
大取次 大阪屋號 日韓書房 京城日報社代理部
 嚴松堂 各地支局及書肆

上田白川



身みと吸物すいものが何なにより好物かうぶつ

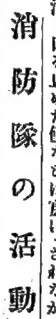
熱心な日本研究者——逝ける智利公使

ソ氏が突然心臓麻痺、果心臓麻痺を誘發したらしく折角光榮ある御大典に参列し乍ら東京にも歸らず死されたと云ふことは非常な氣の毒な大錯である。云々、ソ氏はバルライソの近所に生れたる人にして日本の國風に趣味を有する結果自ら進んで公使となりて赴任して見ると

れ^を劣^るら^ぬ必^{ひつ}死^いの^こ働^{はたら}

消防組の奮闘——五時間の善戦

消防本部から主任小龍警部、大衆検査官以下早く駆け付け指揮官は警察、各所へ配属し南大門、黄金町の二隊は中央の階梯子段に南山町の一隊は屋根に登つた此時早くも火の手は立って右側山に亘り到底救済の見込みなき迄に爲つたので茲に指揮官は、史高塔から以東は見學で高塔を焼くとして以西の半分は死を賭して



消防隊の活動

A black and white photograph showing a person in a small boat on a body of water. The person is wearing a hat and is looking towards the camera. In the background, there is a building with a window. The image is grainy and has a high-contrast, almost stencil-like appearance.

絶する次第であつた更に指揮隊と船協力して高塔の包圍防火に必
ず懸念したのは消火栓の給水
に干して不足を恐るやうな
つた今つ幸福なのは徳意宮
月を利用して發動機関を使用
てからには約二十名は他の組と共に
死の活動場りであつた、火勢稍々寧
靜しに從ひ二十二名は午後五時
迄居つて燃焼の片附に努めた此日迄
中川山嶺其手君は手の指に井上由五
郎が手を握りて發動機関を使用

銀行の野郎共だらう、眞似をしやがるな」と今にもかゝるやうな嘆喟^{なげなげ}の聲が、道筋初段の木村君も惘然^{ぼうぜん}とし、／＼と引き退つたまゝ暫く文^{ぶん}一^{いち}人^{ひとり}が「白上君、甘く化けたなない」

出る一方、其内電報機社から来た一々かして居る。何んか譲渡の儀にて居るが、その大に電報機社から来る。そこを初めて「電報機社」の煙も想ひ大事に至らう止めたのは何により幸であらうと言はれてそんな不都合は原年だとはよく「協賛美」た「ついのよるべ」の華美なるあの大六尺豊かのヌーボー式の船に納まり返り、水越銀鯨然驚き飛び上つて何處かに込みの白で正面を切るこゝこの連中が、建案のまゝで合せて本町通りを歩いたのを流石の提灯行列に夢中になつた民も口あんぐり、その中の水越銀鯨の兩隻銀鯨車が打ち連れて將銀鯨車から本町通りへ繰り出さうと「豆粒」の手拭を頭の上に締めて飛び込んだのを自來の水夫が一「ヤイ、手前走

平の先々月今の住宅が新築落成成り上り
間もない或日のこと屋上から極
ゆるいもので忘れもせぬ工
事△スワヤ大變と云ふので油
が落ちて火元を探して見て
それらしいものは見えぬ餅し

衛生班に助けられて手筈を受託し、
庭跡である野村組では組頭以
て二十一人の防火から警備の物
を造部の焼け落るをきき倒し
も、猛火に最前の止めをまし
銀隊と共に屋根に駆登り防
内三名は手足等にも釘刺す等
で怪傷を負うたがこれまた大
山所の手筈をうけて元氣旺盛
つた

▲本社の火災。昨午
せ著けた多數の員
舞客が吾郎後方へ
避難所に休憩中時
話自然火災のつ

何れも先づ一番不思議に思
る原因で果して何んだん
出火の場所
上つたか
問題が別せずして集ま
屋根裏だと云ふし而かも亦不
氣のあらう筈のない所だ
か不思議がるのは頗ろ無聊
いするのを来合せて居た森勝子



何れも先づ一番不思議に思
る原因で果して何んだん
出火の場所
上つたか
問題が別せずして集ま
屋根裏だと云ふし而かも亦不
氣のあらう筈のない所だ
か不思議がるのは頗ろ無聊
いするのを来合せて居た森勝子

告

[illegible]

